

## 「白老アイヌの生活」 36 分

アイヌ 東アジア日本北海道白老アイヌの生活 八田三郎

撮影 1925/26 年 復元 1992 年 下中記念財団版

### おもな収録項目

- ② 集落外景とチセ（家屋）、参加村人一同、和人関係者など、
  - ② 家事（男女の挨拶、タラを額にあてた薪の運搬、子守、共同井戸での水汲み）、手芸（樹皮からの糸紡ぎ、アットウシ織り）、
  - ③ 婚礼（花婿一家が花嫁宅を訪ねる婿入婚であること、炉端の儀式、結納にあたる贈り物の交換、イナウ、祝宴）、
  - ④ 病気の治療（天井から吊された紐にすがる患者と祈る古老）、
  - ⑤ 葬儀（団子づくり、屋外に遺体を出し、着物で覆い、花ゴザで包む、葬列を組み埋葬地に向かう、墓標の運搬、土葬による埋葬、男、女、子供の墓標）、
  - ⑥ 熊送り（準備、樹上の熊頭蓋骨、イナウづくり、屋内外の儀式、熊を檻から出す、花矢を射かける、丸太で頸を挟む、踊り、清める、屋根から団子を投げる、熊肉料理をふるまう）、
  - ⑦ 円陣をつくっての舞踊、
  - ⑧ 千歳川における操舟（丸太舟、立漕ぎ）、サケ漁（マレプ＝銚による漁、川面を叩いて魚を集める）
- 上記の内、日本語版完成原版で欠落しているのは、⑤葬儀と⑧操舟・サケ漁である。

これらのシーンの多くは、1925 年当時の白老村のアイヌの生活記録ではなく、白老のアイヌたちが、一昔前のアイヌの暮らしぶりは、本来こうだったと再現した暮らしぶりである。ただ、それが全てに徹底している訳ではない。集落の共同井戸が登場するが、これは撮影当時に新たに掘られた井戸で当代のものである。

### 制作のバックグラウンド

北海道帝国大学農学部教授八田三郎(1865-1935)は、動物学者で当時、農学部博物館(現在の北大植物園・博物館)の主任も兼務していた。その收藏品と現実のアイヌの生活ぶりが大きく変容していることに気づき、1926 年秋に東京で第 3 回汎太平洋学術会議が開催されるという報に接すると、来日する外国人に見せるのを主目的に、一昔前のアイヌの姿を映画に残すことを思いついた。八田が何を考え、どうしたかは、1926 年に東京丸の内、日本工業倶楽部講堂を会場に開催された第 18 回財団法人啓明会講演会講演録によって迎えることが可能だが、撮られた側、すなわちアイヌ自身の対応についてはきちんとした記録が無いのは残念だ。八田記述に特徴的なのは、さしたる気負いもなく映像製作を思いつき、実行に移したことである。八田が発注したのは札幌堀内商会だが、既に当時札幌には映画制作のインフラが完備していたことが伺われる。一般的にこの時代の映画プリントの多くは失われており、この作品は、欠損はあるものの大学教官が直接関わった学術映画で完成原版(北大登録 HUNHM48685-48689)が実在する最古のもので、映画史的にも貴重である。

1970年代初め、公益財団法人下中記念財団は、エンサイクロペディア・シネマトグラフィカ(EC)への収録を目指し、北大所蔵のマンロー関連フィルムを預かり、1970年代末に西独国立科学映画研究所(IWF)の協力でサイレント・フレームの可燃性ネガを、アカデミー(トーキー仕様)に複製する作業などを行った。きっかけは、北大の地質学者で、親友だった知里真志保の遺稿出版に尽力されていた湊正雄教授から、ECでアイヌをやるなら、先ず手始めに北大にあるアイヌの映像を整理検討することからやれと、強く勧められたからである。彼は学生時代に、マンローが北大に招かれて行った講演上映会が自分に衝撃を与えたと熱く語っていた。マンロー・八田作品などを、当初はフィルムでの復元で計画したが、なかなか進捗せず、92年ようやくデジタルビデオ処理で復元作業に取り掛かった。児玉マリ氏のもとに、八田が、第3回汎太平洋学術会議で上映した英語版プリントが実在することが判明し、原版の欠落部分をフィルムで複製することは困難なので、全てをデジタル統合して作業した。

92年版は、EC収録を配慮した日英両語併載の中間字幕としているが、日本語字幕は、原作のものを極力活かし、原版欠落部分は啓明会講演録の中から拾い出して補った。英語字幕は1925年当時のものをそのまま使用している。ネイティブスピーカーからは、英語が変だと指摘されることがあるが、八田のものをそのままにしたのが実情である。後年、残存原版を精査する機会があり、原版がイーストマンコダック社のフィルムであったため、キーコードから大部分は1925年製フィルムと確認したが、当時の白老集落の外景だけは1926年製フィルムで撮影されていた。この部分は英語版には存在しないため、英語版を編集替えて日本語版を作製するにあたって追加撮影されたものと判明した。

2000年代になって白老と縁が深い苫小牧駒澤大学岡田路明教授から伺ったところでは、八田三郎の企画に対して協力するか否かで、白老のアイヌ・コミュニティーは二分され、協力を賛意を示した人々のみが撮影に参加したという。またこれらの撮影に関わった人々の子孫が、白老アイヌ民族博物館設立に奔走されたのだという。

2018年現在、可燃性フィルムの完成原版一式は、北大(植物園・博物館)と白老アイヌ民族博物館(あるいはその継承組織)を共同寄贈者として国立映画アーカイブへの移管(国有財産化)が話し合われている。既に著作権は消滅しているが、民族の尊厳に期限など存在しない。私見では、古い映像の処理に著作権法はそぐわず、文化財の様な扱いがよりふさわしくないかと考えている。八田のフィルムと並行して、北大関連のみならず、マンローの歴博所蔵フィルムの寄贈も行われるので、古いアイヌ映像の取扱いのモデルケースになることを願っている。なお英語版35mmプリントは、児玉マリ氏からの寄贈されており、多くの可燃性アイヌフィルムの管理が一括される。これに先立って寄贈予定フィルムは、全て4Kデジタルスキャンが実施された。しかしスキャンデータのエンコードは将来の課題となっている。また、ドイツで作成された35mm難燃マスターは、SDレベルのデジタルデータとともに北大植物園・博物館と白老アイヌ民族博物館の双方に保管されている。

問い合わせ先：岡田一男 k-okada@tokyocinema.net